

バラタナーティヤムを踊るために基本ステップやアラマンディーはアパーナ気(第二チャクラ)を充実させる。この第二チャクラとプラーナ気(第五チャクラ)が合流するとクンダリーニ(シャクティ)が目覚めて、掃除されたスシュムナーをクンダリーニが上昇しブラハマ・ランドラという脳内の神聖な空洞に達するとのことだ。ぜひ体感してみたい。

そして、眉間にある第六チャクラと頭頂の第七チャクラへと開いていくことは三昧の境地が実現することであり、自己を超越し宇宙・神との一体感を得る。

これらは、遙か彼方にある目的のようで他人事のようにも感じてしまうのだが、先人たちは自身の体験を通して得た叡智を脈々と伝えてくれているのだ。自身の内にその目的があることを。

バラタナーティヤムは、困難なその道に光を照らしてくれる神々への祈りや感謝、叡智や普遍の愛を伝えるインド神話を表現している。演目や神話には、ユーモアや摩訶不思議な表現をしながら人生の目的に迷うことなく向えるように先人の叡智を伝えている。その一部を簡略して紹介したい。

「パールヴァティー(シヴァ神の妻サティーの生まれ変わり)は「とぐろを巻いているもの」と例えられる。ある時、シヴァはヒマラーヤで苦行に専念していた。その頃、神々は無敵の悪魔に悩まされていた。この悪魔を倒せるのはシヴァの息子のみであったので、シヴァと結婚する

と予言されていたパールヴァティーが気を引こうとするが全く相手にされなかった。

そこでパールヴァティーは、「遙か彼方上方に居るシヴァ神の愛情を得たい」と意思しあらゆる苦行を続けた。誘惑に負けない不動の心も備えたパールヴァティーにシヴァは「今日から私はあなたの奴隷だ。あなたの苦行によって買われた……」と言い結婚した。」

・上記は、悪魔は心の闇・邪悪のことで、それに支配されて苦しむシヴァにとってパールヴァティーの誘惑も邪悪としてはねのける。しかし生命エネルギー(シャクティ/パールヴァティー)はヒマラーヤで例えられる第七チャクラにいるシヴァに会いたい(自己を超越し宇宙・神との一体感を得る)の意思を持ち、蛇の頭をもたげ苦行によりスシュムナーの結界を通過してクンダリーニを上げていく。元々一つであるシヴァとパールヴァティーだが、イダーとピンガラが中心のスシュムナーに一つになった様を結婚と表していると解釈する。

「南インドの聖者が、南インドの人々が困難に苦しんでいる状況から抜け出せるようにヒマラーヤにいるシヴァ神に助けを求めた。シヴァ神は南インドに行くことと約束をした。南インドに来たシヴァ神は踊りの神ナタラージャ神の姿で楽しいリズムで力強いダンスを踊った。その振動に驚いたアナンタという蛇は飛び上がり、他の蛇たちもリズムに乗ってナタラージャ神と一緒に踊り出した。人々はそれを見ているだけでステージアップした。」